

蝶々の目

泉鏡花作

一

「銀杏樓のおいらんは、何うだい、もう店を張つて居やしないかい。」

と、手拭を片手に圭吉が、細君に言ふと、

「然うね、時間が何ですから、まだだらうとは思ひますが、でも、あのおいらんは道中なしで、内を出るとすぐに縁臺ですからね、出て居るかも知れませんが、一寸見ませう。」

と其のまゝ玄關へ出て、格子戸に立つて半分隠れるやうにして、町内のおなじ側を、片かげを顔に映して透かすと、側が同じなのに、小隠れて差覗くのであるから、あからさまには見えないけれども、大銀杏の樹の下に、母様の膝に抱かれて、縁臺に腰に掛けた、可愛い三重子。可愛さに呼んで、みんな、の姿がちらりと見える。

夏の事で、みんないがまだ這々も出来なかつた時分であつた。所謂善良なる家庭に於いては、銀杏樓だの、おいらんだの、張店だのと口にするのも憚るべき事ながら、何、我等式の所帯だから御免を蒙る

——と此の話手の圭吉は、私にまた話して言ふのである。——

で、銀杏樓のおいらんが店を張ると言ふ意味は、件の嬰兒が其の母ちゃんに抱かれて、嬰兒の家の眞向うの大銀杏が、少々の驟雨ぐらゐでは陰も濡らさないほど繁つて涼しいので、晝寢がはりに涼みに出て居るのを言ふのである。

「あゝ、居ます・・・居ますよ。」

と仰々しく拔足に成つて、怯かすやうに、其の癖、莞爾々々して言ふと、

「速かに御出張かい——其奴は弱つたな。」
と中腰の立構で、意地汚くのもんで居た煙管を落す。

圭吉小父ちゃんは、行水が嫌で錢湯へ行くのに、

一番すいて居る此の時刻を狙ふと、丁度また同じ時分に店を張つて居て、通りかゝる小父ちゃんを視ると威勢のいゝ矢聲を掛ける。「此奴」とか、「ばあ」とか言つて、一寸からかつて、くツくツくと嬉しがつて笑ふ中を、ひよいと抜けて行くと、「いゝゝゝ」だか、「あゝゝ」だか、よくは分らないが、大な聲を響かして呼留める。また引返して、ベツカツこをして、又行くと、直ぐに呼留める、又引返して、御機嫌を伺つて、「失禮、然やうなら」などゝ言つて、とツとゝ急足に成ると、忽ち、「いゝゝゝ」「あゝゝ」と大な聲をする。もう町の角の乾物屋を曲らうとしても、振切れないで、すた／＼戻ると言つた工合で、暑中につき、此の草摺曳には毎度汗を掻いて居るのである。

「何なら、もう些とあとになすつたら。」

「いや、何うにか成る。」

「構はず、ずん／＼行らつしやい。」

「然うは参りません、これでも情人なんだから、

振切るとおいらんが泣きます。」

「然うね！御苦勞様。」

「これは、御挨拶だ。」
と、がらりと出る。

「今日はー」

銀杏の下で最う遣つてる。

「失敬。」

「いゝゝゝ、あゝゝゝ。」

と、何だか眞白なちゃん／＼このやうなものを着て、胸の處を一寸赤い紐で結んだのが、小さな丸々とした両手に張を入れて、突張るやうにして、例の呼留める。

待つて居た！

「どツこい。」

と蹴躓いたやうに反身で留まつて、聊か浮腰に引返して、顔から先へ持つて行く。

「ばあ。」

くツくツくツくツと笑つて、煩しく言へば血が躍るやうに、露出しの手足を匆ねて嬉しがる。

そんなに嬉しがられては、「ばあ、」だけで
は相濟まない。……つい景ぶつを添へたく成
る……。細君が包んで渡した、石罅箱を出して、
懷中へ入れようとして、だらしがないから、ぐわち
やんと落して、

「落こつた。」

なぞと聲を掛けながら、拾つた上、右の手拭を唐
茄子被りで、下り目の顔をぬいと出して、

「瓢男。」

これが炎天の日盛だ、いゝ氣なもので。

湯の話の次手だが、みんなが大すきで、大概毎晩のやうに小母ちゃんにおんぶをして學校横町の錢湯に出掛けた。勿論、母様だの、みんなの姉さんたちと一所の事もあるが、みんないぐら熱い湯に平氣で入る兒は近所に一人もないと言つて、小母ちゃんには喜んだ。——當日、行水をばちや／＼行つたぐらゐでは納まらない、晩にまた湯に入れないと機嫌が悪かつた。備はつた綺麗ずきな處へ、母ちゃんがよく行届いて、一寸でも濕氣のあるものは膚につけて置かないから、おしめを取替へる時なんぞ、仰向けにして紐を解くと、唯白い色が、はつと開いて、夕顔の花が咲くやうに、床しい甘い香が芬とする。……自慢ではないが、疊へも、縁へも、庭へだつて一度だつて粗相をした事はない。

残念ながら、圭吉も細君も、毎日のやうに抱きつ据ゑつして居ながら、膝へも懷へも粗相をされた覚えはない。が、情ない……。二人とも因縁であらう、父たり母たる洗禮を受け得ないのである。

嬰兒の粗相に濡れるのは、家庭の洗禮であらうと、
熟々思ふ事がある、と子のない圭吉は又言ふのであ
る。

讀者は、「おまつちゃん、」と稱ふる御馳走
を御存じであらうか。勿論、御存じはあるまい。み
んみいが大すきなもので、それはお蕎麥であります。

何時の間に味を覺えたか知らないが、一口二口つ
い含ましたので、食べさせると、然もおいしさうに
舌うちをするから、つい其か嬉しくつて、少しづつ
食べさせ／＼したのが、次第に井の口からする／＼
と言ふ勢に成つた。

錢湯の此方に蕎麥屋がある。行きは、此の靈あり、
形ある姫君。小母ちゃんの背の笥の中に、何事もな
く納つて通るが、蕩から歸りがけに、此處まで来る
と……（湯ざめをしないやうに）——半
纏の笥摺がづんと重く成る。……諸國遍歴
の神巫だと、此處へ笥を下して、菖蒲塚を築くか、
小町の柳を植ゑようと言ふ段取である。

あの、睫毛の長い、大きな目をばつちりと――
爰に、「一寸皿のやうに」と言ふ形容がある。
妙齡の娘の目を「皿のやうに」と言つた日には、
妖怪とも變化とも譬へやうはないのだが、嬰兒だと
不思議に水晶のやうに聞えよう、此だけでも小兒は
可愛い――其の、目をばつちりと開いて居る時
は、重量に曲がついて、肩から、ぶる／＼と小母ち
やんの背筋へ掛るのださうである。が、湯屋で最上
場の籠のわきで、いゝ心持に、すや／＼と寝て居
て、柔い人形のやうなのをおぶつて出ても、屹と其
の蕎麥屋の前まで来ると重く成る。秋の雨の小雨が
降つて、行燈の暗い時などは、番傘さした腕にこた
へて自然と重い。・・・此の方が可恐いやうで、
然も小母ちやんは餘計に嬉しかつたさうである。

食べさしたいと思ふ心が、自然に通じるらしいと、
無教育な事を言ふ。

恚う湯上りの白い咽喉を長く伸して、鼻をおぶひ
半纏の黒縹子の襟につけて、振向いて、其處にほた
／＼と滑ツこいみんなみの頬邊を、早やなめがまへ

に密と舌の先を出して　――　此奴がお妖で　――
熟と視ると、ちやんと大きな目を開けて、瞳が行
燈を、ぱつちり視て居る。

母様が一所の時だと、小さな手桶、ぼちや／＼人
形なら、手遊を一包、抱くほどに持つて、ずつと寄
つて、

「おや、又おもく成りましたか。」

「は、少々ばかり。」

と、ひつたりと立留る。

「貴方が氣になさるからですよ。．．．構は
ずどん／＼行らつしやいまし。」

「でも．．．」

と、端から、其の氣はないのだが、故と思はせぶ
りに、少し外方へ歸りかけると、

「うゝゝ、」と言ふ、穩ならぬ聲が出て、ずん
／＼とお尻の方へ重貫が掛る　――　と顔も頭も半
纏の裡に引込んで、両手を肩につかまりながら、足
を突張つて摺下る。

「これは堪らん。」

と小母ちゃんは、一寸おどけて、帯を揺つて、揺
上げながら、

「おゝ／＼、神様はあらたか／＼。」

と、更科とある紺暖簾を潜ると、潜らぬ先から、

「あゝあゝ、」と今度は、肩の上へ體半分踊
り上つて、一杯に胸を張つて、手も足も一所に跳廻
る。

で、蕎麥のおあつらへが濟むと、右の大银杏の下
あたりを、聲ばかりで、唄だか、話だか分らない事
を、冴々と饒舌りながら、自分の前を素通りにして、
屹と小父ちゃんの内へ歸つて来る。

「唯今……」

「みんない、お歸り！」

圭吉は表二階で、もう银杏のあたりから、聲を聞
いて、ひとりで莞爾々々して居るのであるが、

「唯今、」を一寸おいて、其の、「みんない、お歸り。」が聞きたさに、一呼吸撓めて居て、私笑として聞く。・・・みんないお歸り！・・・

「おつと来た。」

と、どゞどん／＼とけたゞましく階子段を駈下りて、

「歸つたか。」

と押被さるやうにして、其の嬰兒のふかし立ての如き、あい／＼しさも桃色の顔を視める。

が　　「　　此はしかし、小母ちゃんが代理をするのでなしに、おなじ言を、みんな自分が自分で、唯今　　「　　お歸り、と言へるやうに成つてからの事だつたかも分らない。」　　「　　階子段の下へ来て、小母ちゃんの背中からだつたり、自分でちよろ／＼と歩行いて来たり。・・・

「唯今！」

「みんな、お帰り。」

と聞くまで撓めて、

「おつと来た。」

矢張然うだ、―― みんなが自分で言ふやうに成つてからの事だ。が、最うぴつたりと氣が合つて、小母ちゃんと血が通ふほどに成つて居ただから、どつちの聲も、後の記憶にかはりはない。

「瓢男！」

と一つ下りめで、手拭なしに、くつくつ笑はせて、

「お極りは？」

「すぐ、後から。」

母様が、恚うちよんと坐つたのを抱へ込むやうにして、いとゞ柔に成つたみんなの頭髪を、ふうはりと撫でながら、

「小父ちゃん、―― 毎晩のやうに濟みませ

ん。」

「何ういたしまして、此方の勝手で……貴方こそ、朝お早いのに恐縮です。」

さらしなの提灯が、宵闇の門をふら／＼と来て、
「お待遠様。」

（此だ、が、まだお分りには成りますまい。）

立派に立ちの出来るやうに成つてから　――　此
の兒は誕生前から、しゃん／＼歩行いた　――　湯
歸りの、此の更科を待兼ねて居たと見えて、門へ提
灯・・・・・・と見るや否や、

「あら、おまつちゃん。」

と小父ちゃんの膝から、ひよいと立つと、中くら
ゐに両手を上げて、手首を振り／＼、可愛い指を
――　あゝ、現に其處へ今も目につく　――　薄
りと白く、淡雪のやうにちら／＼と、踊るやうな姿
で、ふら／＼と、あゝと言ふ間に、玄關を迂つて、
ひよいと框へ出た。出會頭に提灯がスツと入る。

「おまつちゃん。」

と、も一度云つて嬉しがる足が浮いたと思ふと、
ストーンと、素直に土間へ落ちた。

「やあ、お嬢ちゃん。」

「あ。」

「みんないい！」

と夫婦が駆出す時、蕎麥屋のかつぎと、きてんもので、サソクに提灯の柄を口に、井の臺を据ゑたまゝ、見事に片手で抱起した。が、怪我どころか、けろりとして居る。……落したのではない、土間が抱取つたに齊しい。

が、吃驚した、小母ちゃんの、

「みんないい」が高く響いて、向うの家から両親が駈附けた。

両隣も、かたり、かたノノと戸口に出る。

……と言ふ騒ぎで、以来、蕎麥の事を、おまツちゃん

かけ一杯で、其の勸喜。おまつちゃんも嬉しからうが、小父ちゃん、小母ちゃんの嬉しさは、冥加に餘る……勿體ない。

案ずるに、「おまつちゃん、」は、お待遠、
様を様と聞いた、ちやんであらう。何故なら、みん
みいの、まだものを言ひはじめに、一番多く言ふ言
葉には、皆ちゃんが着いて居た。
お母ちゃん、お父ちゃん、小母ちゃん・・・
憚りながら、續いては小父ちゃんであつたか
ら・・・

「あんなに、まあ、私の事を・・・」
と、あとで小母ちゃんは、嬉泣きに泣いたつけが、
一度など日のうち、圭吉の許に立續けに客があつて、
みんないに不沙汰をした。晩方から陰氣な雨に成つ
て、しよぼ／＼と秋の夜の、やがて九時頃。遠慮を
して居た母ちゃんが、傘をさして連れて來たが、格
子を開けると、いつもは、「小母ちゃん、」と
忽ち壯な聲を出して、「今晚は、」などおし
やまを遣るのが、一日待ち暮して、じれたり、すね
たりで、草臥したらしい。唯見ると、お母ちゃんの
半纏おんぶに圓くなつて肩へ頬邊を横に押着けて、

半病人のやうに、元氣のない顔をしながら、それでも口の裡で、

「小母ちゃんは、小母ちゃんノ、小母ちゃん。」
と唄のやうに、泣くやうに、小さな聲で言續けに茶の室へ上つた。

「まあ、どんなに小母ちゃんの許へ。」
と言つて、母ちゃんが抱きおろしながら、
・・あゝ、親の慈悲は廣大である、餘所の小母ちゃんに浮氣をする我兒を、水臭いとも思ふ氣は微塵もない――泣きわらひに嬉しさうにして渡すのを、

「みんない！」
と、小母ちゃんが涙聲で、しめつけると、

「ばゞん！」
とつた、はじめて言つた。しがみついて、
「小母ちゃん」と言ふのを、急いで、せき込んだからである。

「ばゞん。」
と言つて、ぐつたりした。

其の風情！

小父ちゃんは、皆が天人、天女のやうに見えて、
一種敬虔の念を禁ぜず……佛壇の前に思はず、
項を垂れて、潜然として襟を濡したのである。

時に、早速おまつちやんで御機嫌を取結んだが、
其の晩は何うしても内へ歸らうと言はないで、其の
まゝ茶の室へころんと寐た。十二時頃、お母さんが
密と抱いて歸つたつけ。――泊る事を覺えて、
小父ちゃんが留守へ来て、歸るのを待草臥れると、
「歸つたら、起して。」
と言つて、さつさと寐る。

「――さあ！……忘れた。」
勢ひ、外出さきで、うつかり夜をふかした時なぞ
は、少々灯が映してもすれば、戸をしめた店に頼ん
で、おもちやを買つて歸らずには居られない。

「小父ちゃんお出掛け。」

「みんない、お土産は？」

「おもちや！」

と、響ひびのものに應おずるが如ごとしであるもの。

却さ説てい—— 以い來らい、呼よぶ時ときは、「小母ばあちゃん、」
で、用ようありげに、恚かう近ちか々／＼と傾かしいで、ものを言いひ
かける時ときは、「ばぶん。」と言いふ。

「ばぶん—— あノウ」 と言いふ。 . . .

は可いい。けれど、

「小父ぢいちゃん、小父ぢいちゃん。」

口くちも護ゴ謨ム毬まりのやうに發は奮ずんで、

「ぢぢい！」

. . . . は不埒ふらちだ。蓋けだしみんなの發見はっけんではな

い、怪けしからん小母ばあちゃんが教をしへたのである。

—— 何なんだ、何なんだ、—— 今いましがた泣ないた癖くせに

——

「ぢぢい！」

友ともだちの中うちでも、氣きの早はやいのがお父とうさんに成なつた
ばかり。餘程よほど慌あわてたのでないと、まだ餘所よその初孫うひまこに
知ち己かづさへ持もたぬ。然しかも況いはんや、小父ぢいちゃんはまた父親ちゅうおや
にもならない、ずっとお婿むこさんの了簡れうけんで居あるの

に・・・

「小父ちゃん／＼。」

悄氣しよげるのを知しつて、

「ぢぢい！」

「此奴こいつめ。」

けた／＼と笑わらつて遁にげて行ゆく。やツと追おひすが継がると、
すたとん尻餅しりもち、それでも泣なかずに遁にげて行ゆく。

可よし、可よし、覺おぼえて居ゐる。そんな憎にくまれ口くちをきく
なら・・・遊あそんで遣やらないから可いい。

四

「おくんないさい。」

「へい、入らつしやい、――何を差上げま

す。」

「お葱」

「いかほど。」

「お葱一錢ばかり。」

物價の騰る取つき頃で、まださしたる事はなかつたのであるから、みんなの内は五人ぐらしたが

――見真似に覺えたのが一錢ばかり――で、

小父ちゃんは、一所に晩の御飯を濟ましたあとで、當分屹と此のまゝ事見習のお相手を承る。

「へい／＼お入ものは。」

「はい。」

と言つて、がちや／＼忙しい後片附の臺所でねだつて、小母ちゃんだか、女中だかに疊んでもらつた風呂敷を、しな作つて持つた奴をぶらりと出す。

「へい、お葱、極上等の處。」

「とこよ。」

と、あとの方だけ、口の裡で覚えて居る。

處へ、煙管を一本くる／＼と包んで差出す。

「ありがたうござい。」

氣取つて二つばかり合點々々をして、

「然やうなら。」

と、ちよこ／＼と襖際を、箆笥を横に、行くかと

思ふと、直ぐに引返す。

「おくんない。」

「入らつしやい、毎度どうもありがたう存じま

す。」

「ど……いたち、まち、まち。」とおし

やまをやる。

「え、今度は何を差上げます。」

「おらいこん。」

「小さな奥様……」

「はい。」

「唯今のはお大根。――お大根。」
一寸首を傾ける、が矢張り張みんみいは……
「おらいこん。」

結構――昔は大根が鎧を着て、其の愛さるゝものゝために賊を斬つた。……みんみが言ふのなら、大根が、らいこんで、らいこんが、頼光でも、間違つた方が眞個だ。

「へい、いかほど？」

「一錢ばかり。」

重ねて人參。

「一錢ばかり。」

それからお芋も、

「一錢ばかり。」

巻苜から、煙草入、當日の新聞、あり合せたものを風呂敷へ。……おしきせ一銚子で、とろんこの小父ちゃんは、無精で立つのが面倒だから、手近にあるもので間に合せをするのであるが、丸いものと長いものぐらゐは區別をつけないと合點しな

い。 剩へ此の小さな奥様。

「まけて、 澤山。」

とお品がよくない。 以ての外所帯馴れて居なさるから、
一品一個では堪能しない。 往々にして、一錢の葱が
三本だつたり、おなじく人參が二本だつたり、お芋
が五顆の如きに到つては、逆も居ながらでは手廻り
兼ねる。 お茶臺を揃へて、盆を出して、
吸子の蓋をはずすに及んで、小父ちゃんは乃ち一計
を案じる。

「え、御勘定を願ひます。 お代だよ、み
んみい、お寶、お寶。」

唯、みんなみいは圓い顔で、恚う捜すやうに、自分
の肩から胸の方をみすが、忘れた、 ひよ
いと氣のついた目に張を持つて、すた／＼臺所へ走
つて行く。

「ば、ん、ば、ん。」

と、一大事さうに呼んで、
「八百屋ちゃん、御勘定。」
「あいよ。」

で、お惣菜仕入れの鶉豆だの、あの時節だと、青
縷一貫刃と言ふ思入で、莢隠元豆などを持たして寄
越すのだけれど、ともすると面倒だつたり、或は間
接に諷する處あるが如く、
「晦日々々。」と言ふ。

「畜生め。」
と、此方で苦笑をして居る處へ、――
「みちよか！」
「不可ません。」
と頭を振つて見せる。が、此處だ！……何
うして、使して君命を恥めるやうな半間なのぢやあ
ない。

「小父ちゃん、みちよか、よう。」
と鼻聲で色つぼく甘ツたれる。――
は外交官の令夫人うけあひと言ふ才媛。
如何、未來

此方は、そんな事は百も承知で、

「あかべる、ちよん／＼。」

とベツかつこをして見せると、外交官の令夫人だけに負けては居ない。忽ち、目を圓くして、出額で掬つて、

「ぢゞい！」

「此奴め。」

「きやツ　　ー　　」

くツくツ、けた／＼と笑ひながら遁げて行

く・・・勢、何うしても追駈けずに居られます

か。どツこいしよ、と起つ時はおつこふだが、さあ、

起つたわと、勢よく追騷ける、遁げる、追駈追廻す

ー　茶の室から、となりの座敷、女中部屋を抜

けて、玄關をぐる／＼と廻る。途中で、故と逆に廻

つて、遁げるのとばつたり出會す。

「きやツ」　　と言ふ。

間には、ストン／＼と尻餅をつく、みんないばかりに尻餅は突かせて置けない、おなじく此方もすと

ん／＼。

「小父ちゃん、――何です。おいたが過ぎますよ。」

あたか かも 来合せて、臺所の敷居際に軽く居つゝ、ながしの元の小母ちゃんと、世帯話か何かして居る一かあさん》が、小父ちゃんの方へ叱言を言ふ。

から、だらしはない。……いや、をかしい、何うも嬉しい。

五

元來、此の追つかけつこは、其の源を、袂や團扇の「居ない／＼はあ。」に發すると思はれる。少し經つと障子の硝子の覗きつくら——其の時分には、つかまり立をして、よち／＼と棧に縋つて、丁ど硝子を嵌めた下の棧から、漸と目と眉毛だけが出るのである。此は縁側で遊ぶのだが、僅に障子紙二枚ばかりに、顔ぐるみ身體が顯れたり消えたりする。

今度は出窓の上の狭い縁を——勿論お好みによつて抱上げるので——格子と障子の間を、向うへ抜け、此方へ抜け、すつ／＼と、裯さへ曳加減の可愛らしい酸漿娘（緋色のめりんすを着たのを名づける、帽子も赤い。）が、巧みに行つたり來たりして、向うの襖際で、小母ちゃん、ばあ、——此方の茶棚の上から、小父ちゃん、ばあ——天稟だ。

何處の嬰兒も同じで、人は馴れつこに成つて居る

から、別段に更めて誰にお禮を言ふでもないが、これが此だけに、人間業や、ぜんまい仕掛で動けるものなら動いて見たがよい、眞個世界中の奇蹟である。

さて、室内の旗行列　　段々、旗ばかりでは曲がないから、旗々は各自の襟に差翳すことにして、手に手に押立てたる、得もの、襟にあれば、何ぞと見てあれば、拂に、もの指、心張棒。いで高箒の、掛もの棹。いつも小父ちゃんが先陣で、女中まじりに小母ちゃんが殿、眞中はみんないが、掛もの棹でも持てば可いのに、何でも大きなものが好だから、此が必ず高箒で、ぶうか／＼で、よろ／＼ひよろ／＼。・・・・・轉ぶと危いから、扱帯に腰紐、襷に兵兒帯と云ふ處を、張廻したのだけれど、道中が長くなつて、女中部屋から縁側に及ぶと、なか／＼、そんな位では追つかない。工夫をして、神田の親類から鼓の緒を借りて来た　　みんなの手に綺麗でい／＼と聞くと、所作事のやうに見えるが、其の實は荒事で　　次第に調子づいて勢を増すと、わツしよい／＼。

あゝ、腹がすいた、御膳にしよう。

然う言へば、一所にものを食べさせて、肝を冷した事がある。今思出しても慄然とする。．．．．實は、お膳の向うへ坐らせるのに、背後から背中を壓へて居た時分の事で、一層危い。．．．．鯛の潮があつた。ー みんなが大すきだから、一日おきにでも調べたが、此はふくめるのに細心な注意を要する。．．．．小父ちゃんの手では不安と言ふので、小母ちゃんか、或は母ちゃんが内から御出張に成るのだつけ。ー 其の時は女中が附添つて肴をむしつた。

「おいちい？」

「おいちい。」

女中はよく世話をする。．．．．可愛がつた。満

更夫婦にお齒向ばかりでもないやうであるから、安

心をして任せて置くと。ー 一寸猪口を置いて、

雑誌の挿畫か何か覗いて居た途端に、

「はい。」 と言つて、女中がついと立つた。

最う一品持たせて寄越すのに、小母ちゃんが臺所

から呼んだのである。

唯、見ると、丁ど膳の上に、ふつくりと頭だけが
出て居る。目をぱつちりと据えて、熟と小父ちゃん
の顔の方を視ながら、含んだ口をむぐ／＼して居る。
頻にむぐ／＼する。．．．．．蟲が知らすか、ハツ
と思つて、思はず背中から抱込んで、

「あん、」と言ふと、

伶俐だ、伶俐だ。口を開けた、よく開けた。口の
裡が、鯛の鎌の骨でザク／＼、椿の苔に霜柱が立つ
やうに成つて居やうではないか。

蒼くなつた、が、神佛まします、．．．．．此處
は慌てる處でないと、震聲して、
「ちやいして、ちやいして、」

あゝ、伶俐だ、よく分つた。當がつた小皿の裡へ、
ばら／＼とすつかり出してくれた。最う大丈夫。吻
と息を吐いた。

猛然まうぜんとして、づか／＼と立たつた、女中ぢやちゆうを叱しつしようとしたのであるが、臺所たいどころの出口でぐちの敷居しきぬで、八夕とまと留とまつた。齒はが寒さむく成なつたやうな心地こゝちがして、勢いきほひが挫くじけたのである。

取とつて返かへして、きよとんとして居ゐるみんなの背せな中かを唯ただ撫なでゝ、

「いゝ兒こだ、いゝ兒こだ。」

「はい、お待まち遠とほ様さま。」

と、其處そこへ小母はあちゃんが、襟えりと前掛まへかけを一しよ所に外はつしながら明あかるく出でて來きた。

「助たすかつたよ。」

と唐突だしぬけに言いつて、圭吉けいきちは、思おもはず細君さいくんのまだ水仕みづしこ事とに濡ぬれたまゝの手てを・・・取とらうとした。が、今度こんどは小母はあちゃんが蟲むしをおこすと不可いけない、と思おもつて見合みあはせた。

おもちやで、思ひの外だつたのは、大な甲蟲の、
ぶうんと唸つて、駈廻ると、黒奴がぐわちや／＼
ぐわちやと、胡瓜のやうに反つた靴で歩行く奴で、
どつちも鐵葉製のぜんまい仕掛に成つて居た。

四谷ではじめて逢うた時、お巫山戯でない。此を
見つけた時は、小父ちゃんは、鬼の首でも取つた氣
で、嘸ぞみんみいが喜ぶだらうと、自分の買ひもの
も――懷中都合で――半端にして、一散に
家へ歸ると、間の宿だと見えて、みんなが來て居
ない。

「生捉れ。」

と號令を發して、思はせぶりに、兩方の袂を壓へ
て、浴衣だつけが・・・小母ちゃんにも見せな
いで待つて居ると、午睡をして居た處だつたさうだ
けれど、女中が三法師丸と云ふ見得で、高々と抱い
て、莞爾々々と、それ、御光來、御光來。

庭敷の眞中へ先づ据ゑた。

「そら、みんない。」

ぶうんと唸つて、ぐる／＼と廻つて、ぶうん、ぐる／＼と甲蟲が飛廻る、・・・・・・

「わあ。」

と言つて、手を開いて、變に後じさりをする。

「御覽よ、・・・・・・あれ／＼。」

など、小母ちゃんが傍から景氣をつけても、一向に機嫌が冴えない。

「可し、ぢやあ今度は可いぞ。何うだ此奴は。」

と手を放すと、黒奴がピンと立つた。と思ふと、

ぶる／＼と出尻へ揺をくれたが、高帽子を横ツちよ

に冠つて、目をぎよると、あの、疣々のある赤い

唇をべりりと反した。丈立、鯨で一尺ばかり。燕尾

服扮装で、洋杖をついたのが、いまのゆすぶりに連

れて、ぷいと高慢に返返ると、靴でポンと鼻頭を蹴

上げて、ぐわちやん／＼ぐわちやん／＼・・・・・・

歩調正しく競々として、姫君に謁して進む。

「あら／＼、」
と小母ちゃんは目を細うして嬉しがる。

「とわい。」と、みんなは手をすくめた。

ぐわツちゃん／＼。

「今日は。」

ぐわツちゃん／＼。

「とわい。」

「可恐くはないよ、みんない。」

「とわい。」

ぐわツちゃん／＼。

「とわい、可恐い。」と爪立足が、それも力な

く、わな／＼と震足に摺つて、襖に取着いて、ぐわ

ツちゃん／＼の出るのと、逆に、よろ／＼と遁げる

時が、ぜんまいのやんだ時で、小刻に成つて、黒奴

は、靴をがつちん！・・・がち／＼／＼がち／

＼と方向が亂れて、みんなの遁げる方へ、面と向

つて、ぶる／＼と、がつちん！・・・がち／

／＼／＼／＼。

「あツ、」と怯えて、小母ちゃんの胸へ顔を押し
つけて、潜込んだ時、ゴツンと留つて、黒奴は、仰

向むけに成なつてきよろんとした。

一室ひとまが寂然しんと白しらけると、

「はつくしよん。」

黒奴くろめが噫くしやみをした。

夫婦ふうふぎよツとした。が、何なに、小庭こにはの向むかうの堀へいの上うへに野良猫のらねこの三毛猫みけねこが居ゐたのである。

此この二品ふたしなは、みんなの兄妹きやうだいの衆しゅうへ進上しんじやうの事こと。

いや、また、みんなの「とわい。」と言いへ

ば、こゝに一寸ちよつと凄すこいやうで、しかも艶えんな事ことがある。

「おぼる夜に、星の影さへ二つ三つ、四つか五つの鐘の音も

星はあつたが、暗かつた。五月雨上りの戸外珍らしさに、小父ちゃんは、みんみいを、よいと不恰好な棒抱きに抱いて門へ出た。――銀杏の下から、角の乾物屋を、北の横町へ曲つて、中六の通へ出て、形ばかりだけれど、両側に店屋の燈の一寸明い處を抜けた。……何うかして、みんみいの家までは抱いて送つたことはあるけれど、こんなに伸した事は嘗てない。……此で泣かさないで連れて歸れば、――一ぱしの手柄に成る……。小母ちゃんなどは初陣で功名をして歸つたぐらゐに思ふだらう。

「賑だ、賑だ、そら／＼。」

と、駈出しの木の葉天狗が、祇園の祭禮を見せるやうな事を言つて、嬉しがらせながら、一廻して、我家へ近い方の東の横町へ入ると、何を隠さう、兩側とも此處は大な邸の塀續きで、暗くて、寂しい。

抱だいた胸むねも、みんなの身からだ體だも静しづかに成なつた。
其そ處こへ聞きえたのである。

「胸むねに時ときうつ思おもひにて、廓くわくを抜ぬけし十六いざよひ夜よが、落おちて行ゆく方も白しろ魚うをの、舟ふねの篝火かま火りに網あみよりも、
人ひと目め厭いとうてあとさきに、

「みんな、三味線べんべんだよ。」
はてな……みんなが鳴ならす小びい笛くなどゝは較くらべものに成ならない、偉えらいピヤノだの、みんなの唄うたふ小こ兔うさぎよ、小こ兔うさぎの唱しやう歌うたなどは及およびもつかない、例れいの「お」の字じのつく琴ことだのは、朝あさから承うけたまはらされるのだが、つひぞ聞きかない、不ふ思し議ぎに冴さえた音ねじめがする

「ね、三味線べんべん……」

婀娜あだな妾めかけが越こして來きた噂うわさもなし……取とつけの鮭すし屋やにお里さとは居ゐず……何ど處こかの二階かいへ、下した町の娘まちむすめの泊とまり客きやくでもあるのか知しら。

唄うた
・
・
・
・
「しばしたぐずイうはてむ上手うめみより、梅見うめみがへりの船ふねの

「寂さびしい？ 歸かへるか。」

と歩ある行き出だして、

「みんなうみい、兎うさぎさんを唄うたはないかい。」

「甘あまいー」

と此この時ときー

「甘あまい。ー」

と此この時とき、市いちヶ谷や見み附つけの新しん坂ざかあたりと思おもふ、遠とほい處ところの聲こゑが響ひびいた。

「甘あまい。」

赤あか行あん燈どんがスツと、雨あめ上ありの濡ぬ道かの暗くらやみを通とほる影かげが通かよつた。

「とわい。」

と小ちひさな聲こゑで言いふ。

「可こ恐おそいものか、ー 甘あま酒さけだよ。」

「甘あまアゝい。」

「とわい。」

と、今度は細い聲。――其の眞綿のやうな軽い手が、しつかりと小父ちゃんの手を掴んだ、手がねつとりと汗ばんで居るのである。

「雲あしはやき雨ぞらも、思ひがけなく吹晴れて、見かはす月の顔と顔、・・・」

「甘アゝい。」

片手をしつかりと肩に縋ると思ふ間に、いまの間に熱い汗が、ひやりとして冷たく成つた。

「あゝ、眞個か――そんなに可恐いかい――大丈夫だ。」

と思はず意氣込んだ。此の兒の恐怖をのぞくには、我は敵をば恐れまい。

確乎と背を抱くと、軒燈にほんのりと、顔も白く成つて涼い目に、一杯涙を湛へつと見た顔を、ひつたりと胸につけた。前髪が冷いやうに、膚に透つてゾツとする、と颯と揺れるやうに幻影の島田鬚が見

えた。

「岸よりのぞく青柳の、枝もしだれて川の面、
水に入なむ風情なり。・・・

「甘い、甘酒。」

此なら死ねよう。・・・小父ちゃんは相濟ま
んが、心中の刹那を體驗した。

小父ちゃんは、ものに襲はれたやうに駈出した

如何に、此の兒に、口には出さぬ程度でさへ、
「とわい。」と思はせるやうな事を、世間は、人
は、戀人は、夫は、姑は、後に於て行ひ得るか！
愛らしく、すこやかに、幸福あれ、みんない、

――

格子戸を、がた／＼。

「来たぞ。」

そんなに立つけは悪くないのだけれど、みんないのは少しづつだから、すぐに分る、がた／＼。

朝早く、一度寝込へ来て、鼻つまみ、目つゞき、額こつ／＼で一騒ぎ騒いで、其の時はすた／＼歸つたつけ。――漸と不承々に起きて、火鉢の前でなま欠伸を遣つてる處へ、もう二度目の顔を見せた。

おゝ、珍しく帽子が乗つてる……青いリボンがひらりと掛つて

きものも背中で紐がけに成る藍の縮だ。おめしかへ――出額で色が黒いから、眞紅な濃いものより然ういつた色合がよく似合ふ。――最う一つか二つ年を取つてからの事であるが、マントでも肩掛でも、店へ連れて行つて、小母ちゃんが「みんな

い、どれ。」と訊くと、自分で選ぶのが、女の兒
は不思議なもので、自然とうつりのいゝ萌葱、藍、
などの勝つたのを、「みんない、こエ」と言つ
たものださうである。一時も小母ちゃんが連れて、
銀座の何處かへ、冬帽を買ひに行つて、あれ、これ
と言つて居ると、買ものに來合せた、何處のか西洋
の婦人が、ちよちよつと選つて、其の中から、葡萄
鼠の天鵝絨に、藍のリボンのあるのを取つて、すま
して、みんなの頭に、しよつとかぶせた。「可
愛い嬢ちゃん、似合ひます。」と、澄して紐を結
んでくれたさうである。毛は縮れて居ても、目は碧
くつても、此の心意氣は嬉しいよ。氣に入つた。み
んみいによく似合つて、色が白く、きれいに見えた。
あゝ、飽かずに、いつまでも被つて居たつけ。

―― 後の話。

いつもは煩がつて、身體より前に、其の麥藁帽を
かなぐるより早く、スポンとはふり込むのを、おと
なしく被つたまゝで、異う澄した顔色で、其の癖、
用ありさうに立つて居る。

は、あ、結つけ草履か、靴を穿いて居るから、脱がせて、と言ふのであらう。が、よく其のまゝ上つて来ない。――最う小母ちゃんの説によると、いまに御覽なさい、お向うから一人で歩行いて来れるやうに成ると、勝手な時出掛けて来て、此方の氣のつかない時は、靴でも、かつこでも其のまんまで上つて来ますから……と豫言者のやうな、納まつた顔をして言つた事がある。が、さて間もなかつた。がた／＼と言ふから、来たぞと、見ると、框から玄關へ腹這のやうに成つた、足には、赤い靴を穿いたまゝ、と言ふ内に、すば／＼と歩行いて来る、遣つたな、偉い！……」と小父ちゃんは思はず賞めたし、小母ちゃんは雑巾を持ちながら、「ね、果せる哉でせう、」と豫言者だから、聞き覚えの漢語を使つて、雑巾を持った豫言者は、其の豫言の的中したのを然も得意らしい顔をして居た――

「みんな、靴か。」

默然として、揺るやうに帽子を掉つたが、

「いらつちやい、小父ちゃん。」

「あゝ、散歩か。――散歩は晩方ぢやあない

か。」

夏の事ゆゑ、ト言ひながら、故と巻蓐の新しいの
に火を點けて敷居へ立つた。――蓋しお父さん
のするのを見やう見眞似に、「御散歩。」と言
ふと、巻蓐を持ちたがったからである。

「小父ちゃん……のんで……」

然う言つて、巻蓐は取らずに、小父ちゃんの袂を
引いた。其の手にくばりものゝ養老瀧の水の繪團扇
を持つて居て、格子の外へ眞紅な小さな洋傘を仰向
けにして投げてある。

拾つて持たせると、澄してさす。

「傘々さして、えん／＼えんか。」

黙つて、矢張り袂を引いて、大銀杏の方へずん／
＼行く。装は小さな貴婦人の風采がある。ただし、
やつぱり出額で色が黒い。

が、小父ちゃんは、つひぞ、恚うした場面につか
はれる俳優でないから、臺辭のかきぬきが渡つて居

ない。

「今日もお暑い事です。」

「事で……」

と投げ言つて、せつ／＼急ぐらしく、又袂を引張る。

今や、お向うの、みんなの家の出窓の格子に、
母ちゃんの束髪の顔が見えるかと、目の下の洋傘の
上から透すが、影も見えない。此は手放して一人あ
るかせるのか、と前後を二すと、銀杏の上風に蝉の
聲が軽く流れて、朝の間一寸静で、車も通らぬ。い
や通つてもよからう。親獅子は子獅子を試す……
・魂は附添つて居て、怪我のさせツこはない、と
思ひながら、ひかれた手を何時か此方が引いて居た。

露地を入つた。

みんなの家の露地で、ぐるりと鍵の手に折曲つ
て居て、此處は抜裏ではない。――羽目に添
つた廂合の土には、最う松葉牡丹がちら／＼と咲い

て居る。みんなのお父さんは草花が大すきで、専賣局へつとめの間と言へば、如露いぢりをする。夕顔を三鉢、早咲に咲かせて見せると丹精して、やがて蒼も四つ五つ。一輪づゝ、いまや開くと言ふ間に、三鉢ぐるみ夜中に盗まれなすつた。「盗られたの、」と、みんなまで言つたので、一寸見舞つた事がある。それに

「いくら泣いても我兒の泣くは、

お花畑のきり／＼す。」

やんちゃんのために、威勢よく泣いて居ると、却つて安心で、いゝ心持で、町内賑かなやうで嬉しい氣がする。が、夜中夜更にひいと急に聞えると、大丈夫とは知りながら案じられる。「泣いてる、泣いてるな。」小母ちゃんを起すのも氣の毒だから、獨言のやうに言ふと、

「蚤でじれるのでせう。」と、いや、小母ちゃんも寝られない。……「お腹ぢやあないかい。」——「見て來ませう。」「私も行く。」で、掛鍵をはづすことが毎度ある。——そんな

な時は、そつと足音を忍んで、ぬき足さし足で入るのが此の露地で、――中ほどに小窓があつて、其の下へ附着いて二人で蹲む。――

と言ふのは、聲をかけないでも、跫音がすると、嬉しい事には、忽ち勘づいて、むつくり起きて、目を皿のやうにして、「ばゞんち行かう。」と成つて、眞夜中を構はず兩親が迷惑する。で、蹲んで居る。――泣留めば、其のまゝスツと出て、ばた／＼と歸るが、いつまでも泣いて居ると、堪らなく成つて、小母ちゃんがゾツと窓下の羽目をトン／＼と敲く。――あゝ、母ちゃんは、そんな時は、又屹と起きて居るのだから、すぐにすつと窓を開ける、ひつたり顔を寄せて、口を開けただけで意味は通ずる。――「腹々？」「否、蚤。」
「では安心。」――

いま、此の窓へ来たのである。
が、みんないは、もつと袂を引いた。

實は、此のさきへも、折曲つた奥へも、まだ一度

も入つた事はなかつたのである。露地を廻ると！

あゝ綺麗だ。

みんなの眞赤な洋傘は、帆に浮いて、花の露を漕ぐやうである。

お父さんの丹精で、溝際の空地に添つて、細長い花壇が出来た。一夏避暑中の、眞奥の邸の前の駒寄まで草花を植ゑたので、・・・千鳥草、をぐるま、向日葵は、みんなより丈が高い。雛芥子も絞が残つて、みんなの服に影を映す。薫の高い大輪の菫も咲残つた。あの、いろ／＼な松葉牡丹が一面で、其の紅いのに靴がちら／＼。溝べりには、痩せた杜若が、美しい露を上げて居た。

「綺麗だね、みんない。」

團扇づかひをしながら、

「小父ちゃん、こえ。」

「綺麗だ。」

「こえ、小父ちゃん。」

「おゝ、綺麗だ。」

「今朝咲いたの、こえ。」

と指す。……まだ葉ばかりの萩の蔭に、姫百合が一輪、ぽつと俯向いて居たのである。

「小父ちゃん、好き？」

「大好き。」

と、それよりも、みんなの顔を見て、感激して腕ぐみをして凝視めた。

途端に、うちはも、洋傘投出すと、

「ちやい！ちやい！」

と手を煽つて、靴でポン／＼と花の中を飛んだ。

ブーンと立つのを、

「ちやい！」

と又追ふ。

蒼蠅まじりに、蠅が唸るのであつた。

「ちやい！小父ちゃんが、嫌ひよ。畜生」

「あゝ、すきに成つても可い。」

小父ちゃんは、其の小さな手を取つて、甲にぽつ

つりーつある、
蝶てふの目めの如ごとき黒ほくろ子こに接キ吻スした。

九

其の黒子のある優しい手で、背中をトン／＼叩いて、

「ねん／＼よう、ねん／＼よう。」

と子守唄と、寝轉べ、と言ふ請求を、一所にして、

小父ちゃんを、長火鉢の傍へごろんと寝かして、

「おとなに、ちなちやい。」

と、ついと臺所へ出て行く。

――冬の夜は、分けて身に沁みた――

最う、お定りの、く／＼り枕の大きなをおんぶで、

子守唄で、叱つたり、賺したり、お尻から揺上げる

眞似をして、ステンと尻餅をつくなどは、疾の前で、

みんないめ、小父ちゃんを嬰兒にする。

で、肱枕で寝て居ると。ぱた／＼と遣つて来て、

「泣きするの、」

「泣きよう。」

「泣くのか。」

「あん／＼あんと。」

「可し！」

と勢よく言ふと、一寸魂消た顔をする。其處で、

「あん／＼あん。」

と泣く。泣くのを聞きながら、みんなはスツと

臺所へ行く。

「……」此の間、泣いて居なければ成ら

ない。

とた／＼と駆けて来て、背中を撫で、

「お／＼お／＼、嬰兒や、嬰兒や、泣きぢない

の……母ちゃん、お臺所、ご用よ。」

と言ふ。

留める

枕頭へ、トンと坐つて、

「泣いて、小父ちゃん。」

「又泣くのか。」

「うむ、泣いて。」

「あん／＼あん。」

「もつと。」

「あん／＼あん、」

「まぢや……」

「わーいの、わーいの、わー」

「をかちい。ーー泣いて。」

「あん／＼あん。」

今度は、忍び足をして密と出て行く。

「臺所では、寒いが、何となく湯気の立つ中に、小
母ちゃん、女中と一所に働いて居る。鉢皿だの、
庖丁の音にまじつて、みんなの、こちや／＼と話
す声が聞える。」

「」

黙ると、忘れたかと思ふのに、襖際まで来て、

「泣いて。」

「あーん、あーん／＼。」

「ぱん、おちいちい。」

とあの、「おいしい」だか、「おつゆ」

だか、両方兼帯な聲を掛けて、お菜を窺ふ。

「あーん／＼。」

「みんな、そら、嬰兒ちゃんが泣いてるぢやな

いの。
」

「……忙しい。」

「おや、のんきだね。」

「あーん／＼、」

と泣かせて置いて、臺所の障子と、座敷の襖の小さい處に、人形のやうに立つて、恚う茶の室を透して撓めて居る。

「あーん、あーん、わあ／＼わあ。」

「小父ちゃん、いゝ氣だね。」

と小母ちゃんが笑ふと……

「ぱん、そつとして。」

「ほゝゝ。」

「あーん／＼。」

まだ撓めて居る。

「あーん／＼、母ちゃん、母ちゃん。」

「あい／＼、あい。」

ばた／＼ばたと、小刻みにかけて來ると、こんどは、ひつたりと寄添つて、小父ちゃんの背中を抱へ

込
込むやうにして、甘い乳あまちくの香かをりのほんのりとする胸むねで
抱だいて、

「おゝ／＼、かはいそ、かはいそ……… 嬰あ兒か
や、嬰あ兒かや、母かあちゃん、來きたよ、よち／＼。」

と柔ちほろかに背せ中なかを擦さする。情いろ人ににも斯こんな覺おぼえはある
まい。おんなじに兩りやうしん親を持もたぬ小は母あちゃんも嘸なぞ羨うらやま
しからう、ひとりでに、甘あまい、暖あたい、可な懐つかい涙なみだが湧わ
くのであつた。

【完】